

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成23年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	早稲田大学イスラーム地域研究機構
マレーシア側拠点機関：	マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院
() 拠点機関：	

2. 研究交流課題名

(和文)：イスラームと多元文化主義—イスラームとの共生に向けた基礎的研究

(交流分野：地域研究、人文学)

(英文)：Islam and Multi-culturalism: A Fundamental Research Project for Constructing Symbiosis with Islam

(交流分野：Area Study, Humane Studies)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/aa.html>

3. 開始年度

平成 23 年度 (1 年目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：早稲田大学イスラーム地域研究機構

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：イスラーム地域研究機構・機構長・桜井啓子

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：イスラーム地域研究機構・上級研究員・湯川武

協力機関：広島市立大学

事務組織：早稲田大学イスラーム地域研究機構

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国(地域)名：マレーシア

拠点機関：(英文) The Asia-Europe Institute, University of Malaya

(和文) マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) he Asia-Europe Institute, University of Malaya , Executive-Director, Akhir Nasrudin Muhammad

協力機関：(英文) Razak School of Government

(和文) ラザク行政学院

(英文) International Institute of Advanced Islamic Studies

(和文) 高等イスラーム研究所

(英文) Centre for Islamic Development Management Studies, Universiti
Sains Malaysia

(和文) マレーシア科学大学 イスラーム発展経営研究センター

(英文) Institute of Ethnic Studies, Universiti Kebangsaan Malaysia

(和文) マレーシア・ケバンガサン大学 民族研究センター

5. 全期間を通じた研究交流目標

「イスラームと多元文化主義—イスラームとの共生に向けた基礎的研究」という課題を遂行するために、以下3点の目標を掲げた。

1. イスラームと多元文化主義の背景と現状
2. 現代科学技術とイスラームとの架橋
3. イスラームとの共生モデル構築の基盤整備

第一の「イスラームと多元文化主義の背景と現状」においては、相手国として選択したマレーシアに注目する。マレーシアでは、多元文化主義が国是として掲げられる一方、イスラームが国民文化政策の中核を占め、多民族の共生が実践されている。相手国拠点機関であるマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院には、マレーシアの多元文化主義に関する研究蓄積が厚い。これを核として研究を進める。

マレーシアは、土着の人びとに加え、歴史的な海のネットワークにより、南インドからのインド人、中国沿岸部からの華僑が暮らす。さらに、マレー半島から離れた、文化伝統の異なるサバ、サラワク州の人びとをも抱える。また、イギリス植民地時代を経て、西欧との関係も強固となった。このような歴史的宗教的多様性の中で、それぞれのアイデンティティを維持しつつ、調和を目指す知恵が蓄積されている。多元文化主義に基づくイスラームのあり方が具体化されつつあるこの状況は、湾岸など中東を含むイスラーム地域全体の中でも特筆すべきものである。

一方、こうした多元文化主義をとりながら、マレーシアという国家のもとで国際化を成し遂げ、東南アジアをリードする経済的發展を培った。国際社会の一員としてグローバルズを牽引してきたこともマレーシアの顕著な特色である。

今日、イスラームとの共生は、マレーシアや日本のみならず国際社会全体の課題である。イスラーム「原理主義」をはじめとしイスラームとの衝突が取り沙汰される中、グローバルな視座からイスラームとの共生を考えるためには、東南アジアや中東を含めたイスラーム地域全体と国際社会との歴史的な関係を理解することが不可欠である。特に湾岸諸国は、世界各地から異民族、異宗教の動労者を迎え入れており、多様な文化伝統とどのように共存させていくかという問題に直面している。ジョージタウン大学カタール分校は、湾岸諸国の中でも屈指の国際政治学の研究機関であり、ここの研究者の協力を得てイスラーム

地域全体と国際社会の関係を検討する。

マレーシアにおける多元文化主義の背景と現状を学術的に研究し、カタルを足掛かりに湾岸諸国などを含むより広いイスラーム地域と国際社会の関係を検討することは、イスラームとの共生モデル構築へのヒントへとつながる。この第一の目標を、2011年度の主たるテーマとして、着手する。ただし、全体テーマ「イスラームと多元文化主義—イスラームとの共生に向けた基礎的研究」を考える上で必要不可欠であるので、2012年度以降も継続するものとする。

第二の「現代科学技術とイスラームとの架橋」に関しては、日食品・薬品に関わる化学工業の問題に加え、遺伝子工学、先端的医療技術、環境問題への対応など、現代科学技術に対する、イスラームの法や倫理の対応は、イスラーム世界においてもさまざまな議論を巻き起こしている。これらの問題は同時に私たちを含む国際社会全体の問題でもある。

日本ではムスリムがマイノリティであるが、イスラーム諸国と輸出入、観光等を通じて深い関連をもつ。一方、多民族国家マレーシアにおいては、イスラームが国民文化政策の中核を占め、しかも東南アジアの中でも特筆すべき経済発展を成し遂げた。これらを考え合わせると、現代科学技術に関するイスラームの姿勢を問うことは、日本と、マレーシアとの交流意義を見出すものの一つとして位置づけられる。

東南アジアにおける先進イスラーム国であるマレーシアと共同研究・交流することによって、現代科学技術とイスラームとの間の学術的架橋の方策を考察する。この第二の目標を、2012年度の主たるテーマとするために、2011年度に共同研究の準備を進め、2012年度から共同研究を始める。

第三の「イスラームとの共生モデル構築の基盤整備」に関しては、早稲田大学イスラーム地域研究機構は、日本におけるイスラーム地域研究の拠点として、イスラーム法に基づく思想から地域特有の生活まで、多層的な研究を推進している。

この利点を生かし、さらに本事業での蓄積、すなわち2011年度から始めるマレーシアにおける多元文化主義の背景、現状、国際社会での位置づけに関する多層的分析、2012年度から始める現代科学技術に対するイスラームの対応という視点からの分析とその成果の上に、最終年度たる2013年度には、イスラームとの共生モデル構築のための基盤を整備する。

これを基に、さらなる研究を続け、最終的にはイスラーム理解のための日本における国際的センターの確立を目指すものである。

6. 平成23年度研究交流目標

「研究協力体制の構築」

相手国拠点および研究協力機関との研究ネットワーク構築のために、8月までに、2度のミーティング(研究者交流)を、早稲田大学とマラヤ大学で開催する。意見の交換を行うとともに、今後の計画を吟味する。また、マラヤ大学におけるマッチングファンドに関しても相談を行う。

8月には以下に述べるサブテーマに沿って、マレーシアおよびカタルで共同調査を行い、

11月開催のセミナーの企画を練る。共同調査では、日本側研究者が現地に赴き、現地の研究者および大学院生が参加する調査とする。

11月には、今年度の目標「イスラームと多元文化主義の背景と現状」をテーマとしたセミナーを日本で開催し、8月の共同調査の結果を報告するとともに、上記目標に関して討論を行う。

また、11月のセミナー開催の際に、来年度の計画を話し合うミーティングを開催する。

「学術的観点」

本年度の研究目標は「イスラームと多元文化主義の背景と現状」を明らかにすることである。イスラーム国家マレーシアで理想的理念として提案された多元文化主義に対して、マレーシアと日本が、多様な民族・宗教間における調和とアイデンティティの観点から共同研究を進める。

そのために、まず、マレーシアにおける研究蓄積を共有する。さらに、都市居住と初等・中等教育という面からマレーシアにおける多元文化主義の実践的側面を探る。加えて湾岸諸国など中東を含めたより広いイスラーム地域と国際社会との関係を検討する。これら一連の共同研究を通じて、学術的基礎的データを収集し、グローバル社会におけるイスラームとの共生に向けた議論を深める。これらの共同研究によって、多元文化主義実践の学術的知見を確立することができる。

「若手研究者養成」

修士課程および博士課程に属する大学院生、あるいはポスト・ドクターなどの若手研究者に対して広く門戸を開き、積極的な参加を呼び掛ける。共同調査に大学院生の参加を募り、分野を超えた交流を深める。

また、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院のもつアセアン大学ネットワークのハブとしての役割を利用し、広く東南アジアの大学院生に当事業の存在を呼び掛ける。日本側においても、ネットワーク型「イスラーム地域研究」を通して、早稲田大学に限らず多くの大学から若手研究者の参加を促す。

「課題独自の目的」

初年度においては、研究交流目標「1. イスラームと多元文化主義の背景と現状」をテーマとする。そのために

- 1-1. マレーシアにおける多元文化主義に関する資料の共有、
- 1-2. 歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明、
- 1-3. マレーシアにおける初等・中等教育の実情、
- 1-4. イスラーム地域における近代的な主権概念の成立

をサブテーマとして設定し、日本側と相手側の参加する研究グループを作成して交流を深める。4つのサブテーマをそれぞれ共同研究として位置付ける。また、サブテーマをそれぞれ

れ独立した研究課題とするのではなく、「イスラームと多元文化主義の背景と現状」という大きな研究課題を考える上での分業とする。

7. 平成23年度研究交流成果

7-1 研究協力体制の構築状況

5月に早稲田大学から3人のメンバーがマラヤ大学に出張を行い、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院でミーティング(研究者交流)を、実施し、6月のマラヤ大学からの出張日程、8月の調査、および11月の早稲田大学でのセミナーの日程、および研究協力の方向性を確認した。クアラルンプール滞在時の車の手配、および宿泊ホテルの割引など、マラヤ大学側からの貢献があった。

6月に、マラヤ大学から2人、マレーシア国民大学から1人、計3人が早稲田大学を訪問し、意見の交換を行った。またこの機会に、マレーシア側訪問者二人の講演会を早稲田大学で開催し、学生など聴衆を集めた。また、マラヤ大学側からのマッチングファンドに関しても相談を行い、トヨタ財団等への助成の応募を決定した。

8月にはサブテーマ「歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明」に沿って、マラヤ大学の大学院生が参加した共同調査を開催した。

11月26日、27日には、今年度の目標「イスラームと多元文化主義：規範と実態」をテーマとしたセミナーを日本で開催し、8月の共同調査の結果を報告するとともに、上述した目標に関して討論を行った。このセミナーに関しては、マラヤ大学側から5人分の旅費、マレーシア国民大学側から1人分の旅費が拠出された。

また、11月のセミナー開催の際に、2012度の計画を話し合うミーティングを開催し、テーマを「イスラームと現代科学技術」とし、2012年11月初旬にクアラルンプールのマラヤ大学においてセミナーを開催することを決定した。

さらに、2012年2月から3月にかけて、ジョージタウン大学カタール分校と連携し、カタール、アラブ首長国連邦などのペルシャ湾岸地域で調査を行い、2012年度以降に向けて協力体制を構築した。

共同研究の一つである「伝統的における居住様式に関する歴史的研究」の研究を来年度もより円滑に進めるために、鹿島学術振興財団に研究助成を応募し、「歴史的多元文化都市における居住に関する多様性の研究－世界遺産都市ペナンとマラッカ」と題して、235万円の助成が2012年3月に決定した。

7-2 学術面の成果

2011度の研究目標は「イスラームと多元文化主義の背景と現状」を明らかにすることであった。イスラーム国家マレーシアで理想的理念として提案された多元文化主義に対して、マレーシアと日本が、多様な民族・宗教間における調和とアイデンティティーの観点から共同研究を進めることに力点を置いた。

この目標を達成するため、2011年11月26日、27日に渡って、「イスラームと多元文化主義—規範と実態」を開催した。マレーシアをはじめ世界五カ国から70名を超える参加者を迎え、盛況なセミナーとなった。第1日目には、総合地球環境学研究所長・立本成文氏の「政治的統一性と文化的多様性—海のアジア多元主義(プルーラリズム)にみるイスラーム」と題した基調講演に始まり、続いて、「イスラームと多元文化主義」、「初等中等教育における実証的研究」の二つのセッションを開催した。翌27日には、マラヤ大学副学長ハムザ・ハジ・アブド・ラフマン氏の「イスラーム建築史におけるマレーシアのイスラーム建築」に続いて、「伝統的都市における居住様式に関する歴史的研究」、「イスラーム世界における近代主権の展開」、「多文化社会におけるイスラームと近代的公的領域の形成」を開催した。

マレーシアにおける多元文化主義を実態、教育、居住、主権の面から研究考察することができた。加えて京都大学地域研究情報統合センターの山本博之氏が代表を務める「ジャウィ文献と社会」研究会と共同することによって、言語からの分析を加えることができた。

これら一連のセミナーを通じて、グローバル社会におけるイスラームとの共生に向けた議論を深め、多元文化主義実践の学術的知見をある程度確立することができた。また基調講演も含め、2011年度中に英文の論文集を作成し、総ページ数188ページ、300部を印刷することができた。

7-3 若手研究者養成

まず特筆すべき成果は、マラヤ大学と早稲田大学の修士課程の学生の交流に大きな貢献が出来たことである。2011年6月22日、マレーシアとの研究者交流の際、早稲田キャンパス26号館302教室で、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院長ナスルッディン・ムハンマド・アキル氏により「アジア・ヨーロッパ研究院—アジアとヨーロッパの協力に向かつて」と題して、マラヤ大学の研究員の特徴および事業内容の解説が行われた。続いて、マレーシア国民大学教育学部長リリア・ハリム女史により「イスラームと理科教育」と題した講演が行われた。加えて京都大学地域研究統合情報センター准教授山本博之氏により、「マレー／インドネシア定期刊行物データベース化プロジェクト」と題して、同事業に関する紹介がなされた。この講演会をきっかけに、マラヤ大学がマスターコースに早稲田大学の学生を受け入れる道が開かれた。

さらに、プロジェクト全体を通じて、修士課程および博士課程に属する大学院生、あるいはポスト・ドクターなどの若手研究者に対して広く門戸を開き、積極的な参加を呼び掛けた。例えば、2011年夏のペナンとマラッカにおける共同調査には、3人のマレーシア人大学院生が参加した。またその一人は、早稲田大学との交換研究員として、2012年2月から5月まで、「持続的コミュニティを形成するための伝統的都市／集落における文化遺産事業—マレーシア、日本、韓国との比較」というテーマで研究を進めている。

また、11月のセミナーに関しては、ネットワーク型「イスラーム地域研究」を通して、早稲田大学に限らず多くの大学から若手研究者の参加を促したことにより、アメリカ合衆国からの大学院生、学生が参加した。

加えて、2012年2月から3月にかけてジョージタウン大学カタール分校の若手研究者と交流をし、3月にはニューヨーク大学アブダビ校において小規模ながら公開講演を行った。

7-4 社会貢献

11月のセミナーには、世界5カ国から80名を超える参加者を集め、早稲田大学学生をはじめとし、一般の人々も参加する機会をもつことができ、社会への貢献を果たした。

また、アジア・アフリカ学術基盤形成事業の記事を、本機構の年刊誌「早稲田大学イスラーム地域研究ジャーナル第4号」に掲載することができ、広く、学術的成果を広報することも行った。この記事は、当ホームページにも掲載を予定し、より多くの人々に関心を持ってもらえることを目論んでいる。

7-5 今後の課題・問題点

当初、目論んでいた教育に関する共同研究に関して、日本側の研究者側の一身上の問題からうまく研究協力をする事ができなかつた。この課題は、平成24年度に持ち越し、研究交流目標「2. 現代科学技術とイスラームとの架橋」をテーマにする。特に、①科学技術、②環境、③国家と社会というの三つの視覚から検討を行う際に、教育という観点を加味し、その不足を補うこととする。

なお、①科学技術は、平成24年度共同研究「食のハラール：イスラームと科学技術」(R-1)において研究を進め、平成23年度「マレーシアにおける多元文化主義に関する資料の共有」を継続・発展する形で進める。②環境は、平成24年度共同研究「都市環境とイスラーム：現代科学技術との共存」(R-2；平成24年度)において研究を進め、平成23年度「歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明」(R-1；平成23年度)を継続・発展するものである。③国家と社会は、平成24年度共同研究「近現代イスラーム地域の国家と国民：ヒトと社会」(R-3；平成24年度)において研究を進め、平成23年度「イスラーム地域における近代的な主権概念の成立」(R-3；平成23年度)を継続・発展するものとする。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成23年度論文総数 17本

相手国参加研究者との共著 0本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

8. 平成23年度研究交流実績概要

※「10. 平成23年度研究交流実績状況」の概要について記載してください。

8-1 共同研究

1-1. 歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明（共同研究整理番号 R-1）

日本側研究協力者深見奈緒子(1-3)と相手側研究協力者 Akhir Nasrudin Muhammad(2-1)を中心として共同研究を行った。8月に、港市として歴史的に多様な建築的蓄積をもつペナンとマラッカを対象として、宗教施設の分布等、歴史的市街地におけるすみわけの調査を行った。当調査には、マラヤ大学 Faculty of Built Environment に所属する大学院生3名が参加し、その調査結果を11月のセミナーにおいて発表した。

京都大学でインド洋海域における都市を研究している山田協太(1-22)、広島県立大学でマレーシアの建築を研究している宇高雄志(1-25)を研究者リストに加え、共同研究を進めた。また、マラヤ大学で歴史を専攻する Hanizah Idris 准教授、建築史を専攻する Yahaya Ahmad 准教授が11月のセミナーに参加し、実り多いものとなった。マラヤ大学マレーシアが国家として多元文化主義を標榜する以前から、歴史的港市においては、多様な民族と文化が積層、混交していた。マレーシアの歴史的都市において、その状況をとらえることができた。

1-3. マレーシアにおける初等・中等教育の実情（R-2）

日本側研究協力者鴨川明子(1-16)が、出産のため共同研究に参加することができなかった。相手側研究協力者 Amla Salleh(2-17)、Nooreiny Maarof(2-18)が中心となってマレーシアのイスラーム教育について、多文化能力について研究を進めているが、共同研究体制が整っていなかったため、2012年度の課題とする。

6月に研究者交流で来日した Lilia Halim(2-16)が、早稲田大学で「イスラームと理科教育」という講演を行い、学生の参加者を集めることができた。教育の面においては、それぞれの民族の垣根を越えマレーシア人として共存するための国民意識を養うという多元文化主義の側面と、マハティール政権のもと英語での理科系科目の授業に見るように国際人としての英語教育という、相反する側面が同居する点がマレーシアの特色である。

教育という実践面における多元文化主義の効果と逆効果をとらえることによって、イデオロギーとしての多元文化主義の側面から、社会状況の側面へと研究を深化させることが可能となる。2012年度は、教育を①科学技術、②環境、③国家と社会というの三つの視点に分けて研究を進め、2012年度研究交流目標「2. 現代科学技術とイスラームとの架橋」のテーマへと還元させる。

1-4. イスラーム地域における近代的な主権概念の成立（R-3）

日本側研究協力者佐藤尚平(1-8)とカタール研究協力者 Mehran Kamrava(2-12)を中心として共同研究を行った。2011年2月から3月に、佐藤が中心となってドーハとアブダビなどで調査を行い、カタールとアラブ首長国連邦（UAE）の主権概念の発展に関わる資料の収集と、協力体制の構築を行った。また、ニューヨーク大学アブダビキャンパスで招待講演を行うなどして、幅広い社会に向けて成果を発信した。

グローバル社会におけるイスラームとの共生を考えるためには、東南アジアや中東を含

めたイスラーム地域全体と国際社会との歴史的な関係を理解することが不可欠である。特にカタールと UAE は、マレーシアとほぼ同時期にイギリス帝国から独立を達成して近代国家として成立するなどマレーシアと共通項が多い一方、その誕生過程については研究が進んでいない。近代的な主権概念の成立は、国際政治史の最も根源的な問題でもあり、資料の収集という基礎的段階から検討することによって、イスラームと国際社会との共生に向けた歴史的な展望を得ることができた。また、カタールと UAE は、独立の経緯において双子の関係にあるだけでなく、多数の外国人労働者との共生という課題を抱えている点でも共通する。両国を対照しながら検討することによって、イスラーム地域と国際社会全体の共生に向けた歴史的な考察を行っている。

こうした研究蓄積は、平成 24 年度の事業全体、及び共同研究につながる着実な成果として位置づけられる。

8-2 セミナー

11 月 26 日、27 日に早稲田大学において「イスラームと多元文化主義—規範と実態」のセミナーを開催した。研究テーマに沿って、第 1 セッション：イスラームと多元文化主義、第 2 セッション：初等中等教育における実証的研究、第 3 セッション：伝統的都市における居住様式に関する歴史的研究、第 4 セッション：イスラーム世界における近代主権の展開、第 5 セッション：多文化社会におけるイスラームと近代的公的領域の形成の 5 つのセッションを設けた。

セミナーは、広く学生、大学院生、一般に公開とし、各セッションの発表時間よりも討論およびフロアーからの質問時間を長くとり、セミナーに参加する専門的研究者との交流の機会を設けた。イスラーム地域研究を目指す若手研究者にとって、「イスラームとの共生」は、フィールドや研究手法が異なっても、重要な現代的課題であるので、多くの若手研究者に刺激を与えることができた。

ネットワーク型「イスラーム地域研究」を通して、早稲田大学に限らず多くの大学から若手研究者の参加を促したことにより、アメリカ合衆国からの大学院生、学生が参加した。

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

本事業を円滑化するために、主に第一 4 半期に研究者交流を行って、事業の計画を再立案し、セミナー、共同研究を行うことができた。

9. 平成23年度研究交流実績人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先		派遣元								
		日本 〈人／ 人日〉	マレーシア 〈人／ 人日〉	カタール 〈人／ 人日〉	UAE 〈人／ 人日〉	クウェート 〈人／ 人日〉	オマーン 〈人／ 人日〉	バーレーン 〈人／ 人日〉	サウジア ラビア 〈人／ 人日〉	合計
日本 〈人／人日〉	実施 計画		6/44	1/20	1/20	0/0	0/0	0/0	0/0	8/84
	実績		5/33	2/12	2/18	1/3	0/0	0/0	0/0	10/66
マレーシア 〈人／人日〉	実施 計画	7/28								7/28
	実績	7/36 (1/4)								7/36 (1/4)
オーストラリア 〈人／人日〉	実施 計画									
	実績	1/5								1/5
合計 〈人／人日〉	実施 計画	7/28	6/44	1/20	1/20					15/112
	実績	8/41 (1/4)	5/33	2/12	2/18	1/3	0/0	0/0	0/0	18/107 (1/4)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は()をのぞいた人・日数としてください。)

9-2 国内での交流実績

実施計画	実績
10/28 <人／人日>	8/15 (11/22) <人／人日>

10. 平成23年度研究交流実績状況

10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	23年	研究終了年度	25年
研究課題名	(和文) 歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明 (英文) A Historical Study of Residential Diversity in Traditional Urban Areas				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 深見奈緒子・早稲田大学イスラーム地域研究機構・教授 (1-3) (英文) NAOKO Fukami, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	Akhir Nasrudin Muhammad (2-1) The Asia-Europe Institute, University of Malaya, Executive-Director				
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先	日本	マレーシア		計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画	1 / 14		1 / 14
	<人/人日>	実績	1 / 15		1 / 15
		実施計画			
	<人/人日>	実績			
		実施計画			
	<人/人日>	実績			
	合計	実施計画	1 / 14		1 / 14
	<人/人日>	実績	1 / 15		1 / 15
	② 国内での交流 0 人/人日				
23年度の研究交流活動	ペナンとムラカにおいて、マラヤ大学と共同で、宗教建造物、コミュニティのすみわけの調査を行う。				
研究交流活動成果	調査期間中、相手国側代表の大学院生2名、および同マラヤ大学建築学科の大学院生1名が調査に同行し、数多くの聞き取りと、写真撮影、図面の作成を行った。				
日本側参加者数					
	2名	(13-1 日本側参加者リストを参照)			
(マレーシア) 国(地域) 側参加者数					
	2名	(13-2 マレーシア国(地域) 側参加研究者リストを参照)			

整理番号	R-2	研究開始年度	23 年	研究終了年度	25 年
研究課題名	(和文) マレーシアにおける初等・中等教育の実情 (英文) An Empirical Study of Primary and Secondary Education in Malaysia				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 鴨川明子・早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・助教 (1-16) (英文) KAMOGAWA Akiko, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, Assistant Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	Jainabee Kassim, Faculty of Education, Educational Policy, Management and Administration, National University of Malaysia, Lecturer (2-11)				
交流人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先	日本	マレーシア		計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画	1/14		1/14
	<人/人日>	実績	0		0
	<人/人日>	実施計画			
	<人/人日>	実績			
	<人/人日>	実施計画			
	<人/人日>	実績			
	合計	実施計画	1/14		1/14
	<人/人日>	実績	0		0
	② 国内での交流 0 人/人日				
23 年度の 研究交流活動	マレーシアにおける初等・中等教育に関して、クアラルンプールおよびサバ、サラワクにおいて、言語別クラスの採用状況、および各学校の民族別の状況に関して共同調査を行う。				
研究交流活動 成果	日本側研究者が妊娠出産のため、相手国との交流を行うことができなかった。ただし、マレーシア国民大学でイスラーム教育と多文化教育に関する研究に着手しているため、24 年度も継続し、不足分を補う。				
日本側参加者数					
	1 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)			
(マレーシア) 国 (地域) 側参加者数					
	4 名	(13-2 マレーシア国 (地域) 側参加研究者リストを参照)			

整理番号	R-3	研究開始年度	23年	研究終了年度	25年					
研究課題名	(和文) イスラーム地域における近代的な主権概念の成立									
	(英文) The Evolution of the Modern Norm of Sovereignty in the Islamic World									
日本側代表者氏名・所属・職	(和文) 佐藤尚平・早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手 (1-8)									
	(英文) SATO Shohei, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University, Research Associate									
相手国側代表者氏名・所属・職	Mehran Kamrava, Center for International and Regional Studies, Director (2-12)									
交流人数	① 相手国との交流									
(※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	派遣先	日本	カタール	UAE	クウェート	オマーン	バーレーン	サウジアラビア	計	
		派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	
	日本	実施計画	1/20	1/20	0/0	0/0	0/0	0/0	2/40	
	<人/人日>	実績	2/12	2/18	1/3	0/0	0/0	0/0	5/33	
	<人/人日>	実施計画								
	<人/人日>	実績								
	<人/人日>	実施計画								
	<人/人日>	実績								
	合計	実施計画	1/20	1/20	0/0	0/0	0/0	0/0	2/40	
	<人/人日>	実績	2/12	2/18	1/3	0/0	0/0	0/0	5/33	
② 国内での交流		0人/人日								
23年度の研究交流活動	カタールと UAE において、両国の誕生過程に係わる資料の収集、整理を行う。カタールにおいては、ドーハのカタール財団の各図書館を中心に作業を行い、UAE においては、国立公文書館や各研究所の附属図書で調査を行う。									

研究交流 活動成果	ジョージタウン大学カタール分校の若手研究者と交流をし、3月にはニューヨーク大学アブダビ校において小規模ながら公開講演を行った。	
日本側参加者数		
	1 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)
(マレーシア) 国 (地域) 側参加者数		
	3 名	(13-2 マレーシア国 (地域) 側参加研究者リストを参照)

10-2 セミナー

—実施したセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) イスラームと多元文化主義—規範と実態
	(英文) Islam and Multiculturalism- Norms and Forms
開催時期	平成 23 年 11 月 26 日 ~ 平成 23 年 11 月 27 日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、早稲田大学大隈タワー
	(英文) Japan, Tokyo, Waseda University, Ookuma Tower
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 湯川武・早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究院教授
	(英文) YUKAWA Takeshi, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (日本)	
日本 〈人/人日〉	A.	5/9
	B.	
	C.	11/22
マレーシア 〈人/人日〉	A.	4/21
	B.	
	C.	1/4
オーストラリア (マレーシア側) 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	10/35
	B.	
	C.	12/26

A.セミナー経費から負担

B.共同研究・研究者交流から負担

C.本事業経費から負担しない(参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>4つのサブテーマ、1-1. マレーシアにおける多元文化主義の背景、1-2. 歴史的都市における居住に関する多様性の歴史的解明、1-3. マレーシアにおける初等・中等教育の実情、1-4. イスラーム地域における近代的な主権概念の成立に関する共同研究の成果を発表する。加えてこれらの研究を総合し、多元文化主義が現代社会が抱える大きな問題の一つであるイスラームとの共生に対してどのような役割を果たせるのかを検討し、本事業の最終的な目標である「イスラームとの共生モデル構築」への基盤とする。</p>
<p>セミナーの成果</p>	<p>イスラーム国家マレーシアで理想的理念として提案された多元文化主義の実践的側面を、マレーシアと日本が、多様な民族・宗教間における調和とアイデンティティの観点から共同研究することによって、イスラームとの共生に向けた、学術的基礎的データを収集するとともに、多元文化主義実践の学術的知見を確立するという成果に関しては、多元文化主義(Multiculturalism)と多元主義(Pluralism)が大きく異なる点を認識しないといけないという点を確認した。また、政治的な主義あるいは規範と、実際の社会における居住文化や言語などの多様な実態とは大きく乖離している点が明らかとなった。</p> <p>「イスラームと多元文化主義」においては、マレーシアにおけるハラルに関する日本企業の取り組み、東南アジア大陸部におけるムスリムマイノリティの状況における多元文化主義のあり方、マレーシア・イスラーム開発省の作成した金曜礼拝文における多文化主義への言及、シンガポールにおけるムスリムと非ムスリムの人口動態などが明らかとなった。</p> <p>「初等中等教育における実証的研究」からは、マレーシアにおけるイスラーム教育教科書における多文化主義抽出と解析、マレーシアの給油の基礎的多文化理解能力、イランにおける学校教育の多様性とシーア派主義などを論点とした。</p> <p>「伝統的都市における居住様式に関する歴史的研究」では、マレー諸島における港市の歴史、コロンボにおける植民地時代に構築されたインド洋都市ネットワーク、世界遺産ジョージタウンのムスリム共同体の対応、ペナンとマラッカにおける多文化都市の状況などを話し合った。</p> <p>「イスラーム世界における近代主権の展開」からは、マレーシア人のアイデンティティに関してマハティールがどのような選択を行ったのか、20世紀中葉の湾岸諸国など中東を含めたより広いイスラーム地域における主権概念の成立過程、19世紀にジャワ島</p>

	<p>アラブ商人が記述したオランダ人総督に関する分析などが話題となり、イスラーム地域と国際社会との共生に向けた歴史的な展望を得た。</p> <p>「多文化社会におけるイスラームと近代的公的領域の形成」では、近代法とイスラーム法という 2 元的司法、1950 年代のシンガポール人ウラマーの近代主義、アラビア文字を用いたジャウイの復活、ジャウイで刊行された月刊誌の論考などが討議された。</p> <p>これらの諸成果を統合することにより、イスラームを単に多様性あるいはグローバリズムの中に閉じ込めるのではなく、他者との共生という側面において、イスラームにどのような可能性があるのかを明らかにする布石が提示された。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>早稲田大学イスラーム地域研究機構が中心となり、共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究、NIHU プログラムイスラーム地域研究を基盤とした。NIHU プログラムとの共同のため、キーノートスピーチを同じく人間文化機構に所属する総合地球環境学研究所長に依頼した。また、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院を中核したので、キーノートスピーチのために、マラヤ大学副学長が来日した。</p>	
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 セミナー参加者の旅費・会議会場費・印刷代等 金額 1,205,074 円</p>
	<p>マレーシア 国側</p>	<p>内容セミナー参加者の旅費負担 金額 20 万×6 120 万円</p>
	<p>() 国 (地域) 側</p>	<p>内容 金額</p>

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先		日本	マレーシア		計
派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
日本 <人/人日>	実施計画		4/16		4/16
	実績		4/18		4/18
マレーシア <人/人日>	実施計画	1/4			1/4
	実績	3/15			3/15
<人/人日>	実施計画				
	実績				
合計 <人/人日>	実施計画	1/4	4/16		5/20
	実績	3/15	4/18		7/33
② 国内での交流		3/6 人/人日			

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
北海道大学・准教授・佐藤健太郎	日本・東京・早稲田大学	2011年4月14日～15日	2011年度事業の計画立案
広島市立大学・教授・オマー・ファルーク	日本・東京・早稲田大学	2011年4月14日～15日	2011年度事業の計画立案
広島市立大学・教授・オマー・ファルーク	マレーシア・クアラルンプール・マラヤ大学	2011年5月4日～9日	2011年度セミナー、共同研究の計画立案
早稲田大学・研究院教授・湯川武	マレーシア・クアラルンプール・マラヤ大学	2011年5月5日～8日	2011年度セミナー、共同研究の計画立案

早稲田大学・上級研究員・深見奈緒子	マレーシア・クアラルンプール・マラヤ大学	2011年5月5日～8日	2011年度セミナー、共同研究の計画立案
早稲田大学・研究助手・佐藤尚平	マレーシア・クアラルンプール・マラヤ大学	2011年5月5日～8日	2011年度セミナー、共同研究の計画立案
広島市立大学・教授・オマー・ファルーク	日本・東京・早稲田大学	2011年6月3日～4日	マレーシア側との意見調整の準備
マラヤ大学・アジアヨーロッパ研究所長・ナスルッディン・アキール	日本・東京・早稲田大学	2011年6月21日～25日	2011年セミナー、共同研究の実務話し合い
マラヤ大学・准教授・シティ・カッシム	日本・東京・早稲田大学	2011年6月21日～25日	2011年セミナー、共同研究の実務話し合い
マレーシア国民大学・教授・リア・ハリーム	日本・東京・早稲田大学	2011年6月21日～25日	2011年セミナー、共同研究の実務話し合い

1 1. 平成23年度経費使用総額

	経費内訳	金額 (円)	備考
研究交流経費	国内旅費	367,860	
	外国旅費	3,837,447	
	謝金	203,225	
	備品・消耗品購入費	21,983	
	その他経費	569,485	
	外国旅費・謝金に係る消費税	0	
	計	5,000,000	
委託手数料		500,000	
合 計		5,500,000	

1 2. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額 (円)	交流人数<人/人日>
第1四半期	1,037,732	10/39
第2四半期	933,840	1/15
第3四半期	1,281,732	10/35
第4四半期	1,746,696	5/33
計	5,000,000	26/122